

小学校国際交流支援プロジェクト ～小学校の国際交流支援「テディベアプロジェクト」～

団体名●清水ゼミナール／代表者名●清水和久（人間科学部こども学科・教授）

1. はじめに(背景・目的・目標)

清水ゼミ(3年生)では県内の小学校と台湾の小学校との国際交流支援を行っている。具体的には、ぬいぐるみを交換留学生として台湾に送り、台湾からもぬいぐるみの留学生を送ってもらい。その滞在記録をとおして異文化理解を行うものである。ゼミ生は、日本と台湾の各交流校の担当となり、1年間、その国際交流支援を行うものである。具体的な支援行動は大学生の報告に任せるとして、本報告では、プロジェクト後に日本の先生方にとつたアンケートをもとにこのプロジェクトを振り返る。

このプロジェクトの目的は、先生自身が他の国の先生とつながり、その交流の面白さを実感してもらうことで、児童に対しても国際交流の面白さを広めることにある。他国の教育の様子を知ることによって日本の教育を客観的に見ることができると思われる。また同時に英語の必要性も感じてもらうことをねらいとする。

2. 活動内容

このプロジェクトを実施するためには、日本の小学校の先生とその学校を担当する学生とのつながりを保つことが重要となる。そのため以下の zoom 会議を月1回開催し、意思疎通の場とした。

- 1) プロジェクトの年間計画
- 2) 月1回の教員と学生との zoom 会議
- 3) 教員に対するアンケート調査

2-1 プロジェクトの年間計画

5月	国際交流校の募集
6月	小学校での導入ワークショップ
9月	国際交流スタート 送付物準備
10月	自己紹介カード、ぬいぐるみの送付
11月	大学生の小学生同士の zoom 会議支援
12月	大学生の台湾の小学校訪問
1月	大学生の台湾報告会
2月	ぬいぐるみの返却、受取り

2-2 月1回の教員と学生との zoom 会議の実施

第1回	6月19日	キックオフ会
第2回	8月26日	交流の準備会
第3回	9月29日	交流スタート時の留意点
第4回	10月27日	zoom 交流のやり方
第5回	12月 1日	交流の課題について
第6回	1月19日	台湾報告会について

毎回の小学校の教員との zoom 会議は、月曜の16:00から実施。zoom の全体会議の後、担当の学生と先生とで個別でブレイクアウト会議を行った。内容は、ぬいぐるみの送付時期、送付方法、zoom の実施時期、児童の交流掲示板である padlet の書き込み状況、台湾の書き込み状況の把握などについて情報交換を行った。小学校教員との個別の情報交換はプロジェクトの進行上重要であった。

2-3 教員に対するアンケート調査

今年度参加校は、鞍月小、三馬小、杜の里小、金石町小、みさき小、泉野小の6校であった。

回答数10名(参加クラスの担任及び英語専科1名)

2-3-1 教員の事前意識

教員の事前意識：海外教育や英語教育に対しては概ね「ある」「必要だ」と肯定的な関心を持っていたが、実施前は「かなり手間がかかりそう」「難しそう、不安だ」といった懸念も多かった。

2-3-2 交流活動における主な成果と「手ごたえ」

○ zoom 会議（手ごたえ度60%）

実際に相手とつながることで、英語を話すモチベーションが飛躍的に向上した。班の仲間と協力して言葉の壁を乗り越えようとする姿が見られた。

○カード交換・プレゼント(手ごたえ度60%)

手書きのカードや現地の品物を通じて、国際交流の実感を伴うことができた。台湾を身近に感じる大きな要因となった。

○大学生による報告会(手ごたえ度100%)

台湾の学校生活を知ることによって、日本との共通点や相違点への興味を喚起した。専門的な視点からの情報は児童の満足度が高かった。

○ Padlet(掲示板)(手ごたえ度30%)

相手がいることを意識しながら英語を使用する機会として機能した。

○100人村・VR体験(手ごたえ度90%)

世界の広がりについて興味を持つきっかけになった。

全体的に大学生が直接小学校へ出向いて行った活動(100人村、台湾報告)に先生方が手ごたえを感じていた。

2-3-3 教員が直面した課題と負担感

○運営上の課題

・日程・時間の調整：日本と台湾の時差や、互いの学校行事・授業計画のズレを調整することに困難を感じるケースが多かった。

・コミュニケーションの壁：台湾の教員との直接的なやり取り(LINE等)において、翻訳機能で対応可能ではあるものの、英語での意思疎通に不安を感じる場面があった。

・準備の負荷：zoom会議の原稿準備や、児童のサポート、物品の発送準備など、通常の校務に加えた作業量が多く、負担感を感じる教員も少なくなかった

○技術的・物理的課題

・通信環境：zoom会議において、相手校の音声品質が低い場合や、Chromebookの音量が不十分な場合があり、円滑な対話を阻害する要因となった。

・ティビアの運用：6年生などの高学年では、他の行事(連合音楽会や卒業準備等)との兼ね合いで、ティビアに十分な意識を向ける余裕がない場合があり、その教育的効果について疑問を呈する意見もあった。

成果、結果の考察

アンケートからは、次年度も条件がそろえばやってみてみたいという声が多かった。また、大学の支援として、教員の事務的な仕事量の軽減やzoomなどの技術的な障害の軽減が求められていることがわかった。

本プロジェクトは、児童にとって「一生の経験」となり得る極めて有意義な教育機会であることが感想

から読み取れた。教員の負担感という課題はあるものの、大学のサポートと適切なカリキュラム編成を組み合わせることで、持続可能な国際交流モデルとしての確立することができると考える。

今後の課題、展望

○指導者の意識の変化

多くの教員が「国際交流は不可能に近いと思っていたが、実現できることがわかった」「教育の幅が広がった」と回答している。一方で、英語スキルの必要性を再痛感した教員も多く、自分自身の学びや今後の指導に役立つという認識が示された。

○改善点

教育課程への組み込み：突発的な活動ではなく、学年初めから「総合の時間」等の年間計画に位置づけることで、見通しを持った実施が必要である。

・事前情報の充実：過去の交流資料や、台湾側の文化(プレゼント交換の傾向など)を事前に把握することで、より適切な対応が可能となる。

・大学との連携維持：金沢星稜大学の学生によるサポートは、設定や運営において不可欠であり、今後も継続的な支援が求められている。

最終的には現場の先生方が、大学の支援なしでもオンライン交流を実行できることが望ましいが、まず第一歩として、大学の支援付の国際交流を体験して、自分自身や子どもの変容を認識してもらい、総合への導入に道を開いてもらいたいと考える。また学生自身が裏方としてかかわることで、教員としてのスキルを磨くことができると考える。



図1 台湾との国際交流の教員の思考構成図